データから見る幼児教育

災害への対応として大事なもう一つのこと
～ネットワークづくり～

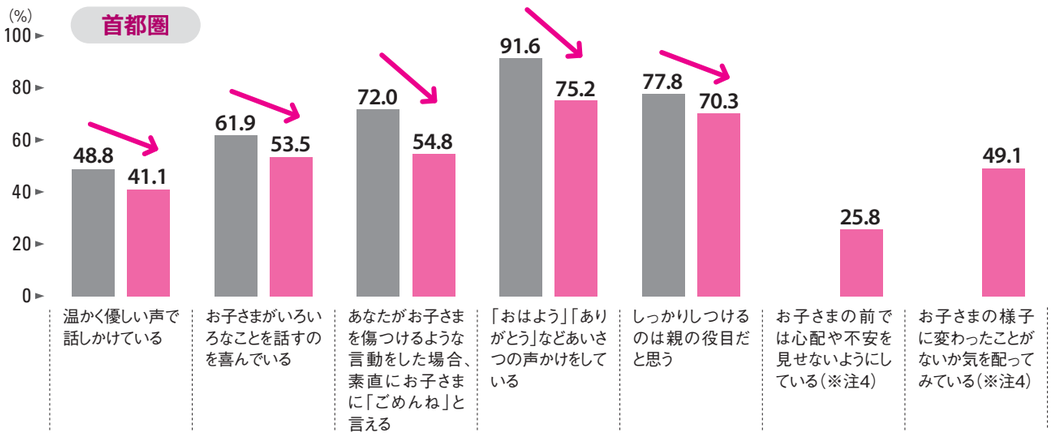
ベネッセ次世代育成研究所は、2011年5月末 、0～5歳児をもつ3,096名の母親に震災による子育ての影響についての調査を行いました。この調査結果からは、非常時における母親の育児不安や、それを軽減するためのヒントが見えてきました。園で家庭への支援を考える材料のひとつとして、また、保護者への発信にもぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください
（例：ベネッセ次世代育成研究所『3.11 東日本大震災の影響　子育て調査』（2011））

首都圏では母親の子育てに対する余裕が減った

Q あなたはお子さまの子育てについて、どのように考えたり、行動したりしていますか。

図1 0～2歳児の子どもへの接し方　■震災前（582）　■震災後（387）



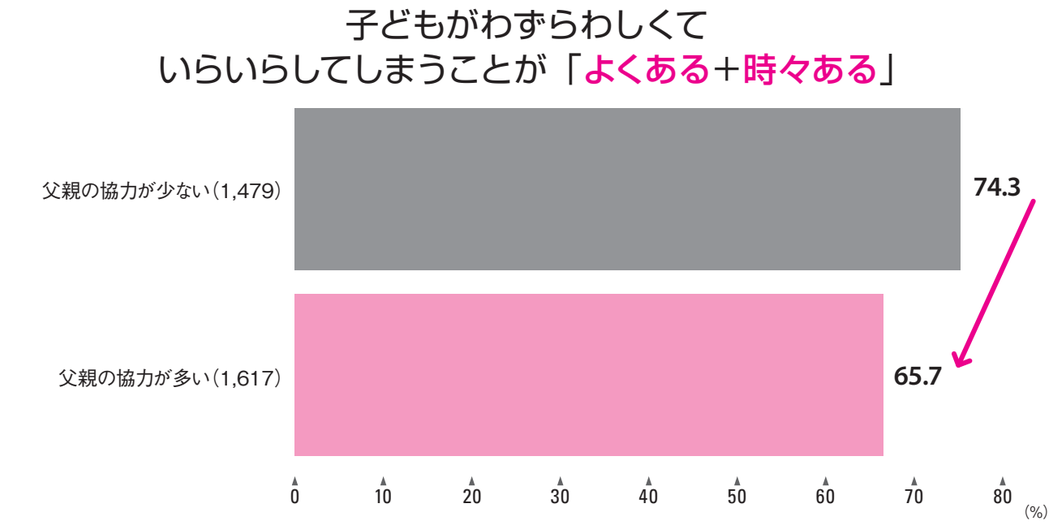
注1：「あてはまる」の%。　注2：0～2歳の第1子をもつ首都圏の母親（387人）の回答を分析。
注3：震災前の数値は「第1回妊娠出産子育て基本調査」（2006年11月ベネッセ次世代育成研究所実施）の結果。　注4：震災後だけの項目

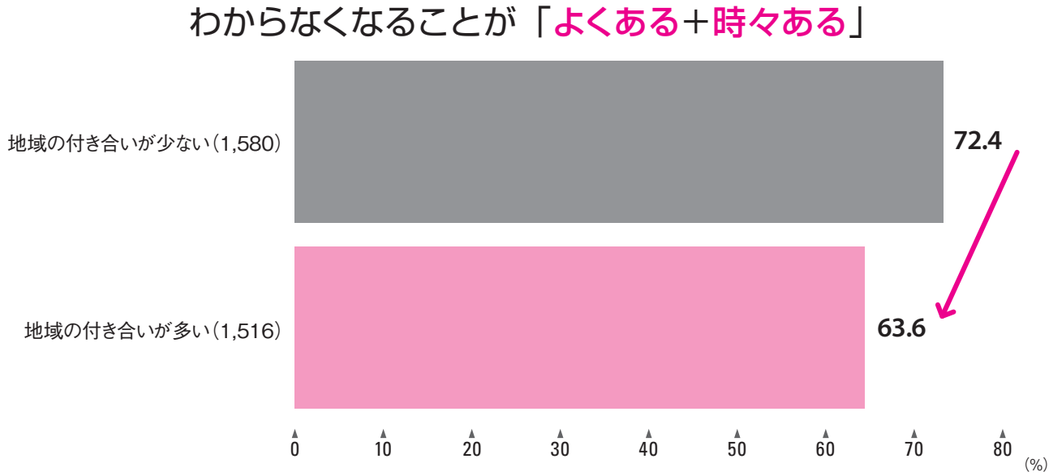
★「温かく優しい声で話しかけている」、「あいさつの声かけをしている」など、温かい態度で子どもに接しているかについて震災前と震災後にそれぞれ聞きました。震災後は「あてはまる」と答えた母親が減少していました。自由記述には「震災以来、イライラすることが増えてしまい、子どもにあたることが出てきてしまいました。反省しているのに、またイライラしてしまう。そんな自分が嫌になります」（首都圏_0歳児の母親）という声も見られ、母親の葛藤が垣間見えます。このような背景には、子どもの命を守るという大きな使命が生まれたために、母親たちに普段の余裕がなくなったのではないかと指摘する専門家もいます。

父親の協力や地域とのつながりが多い母親の育児不安は少ない傾向

Q あなたは最近、子育てについて次のようなことを感じることがありますか。

図2 父親の協力度・地域のつながりと育児不安





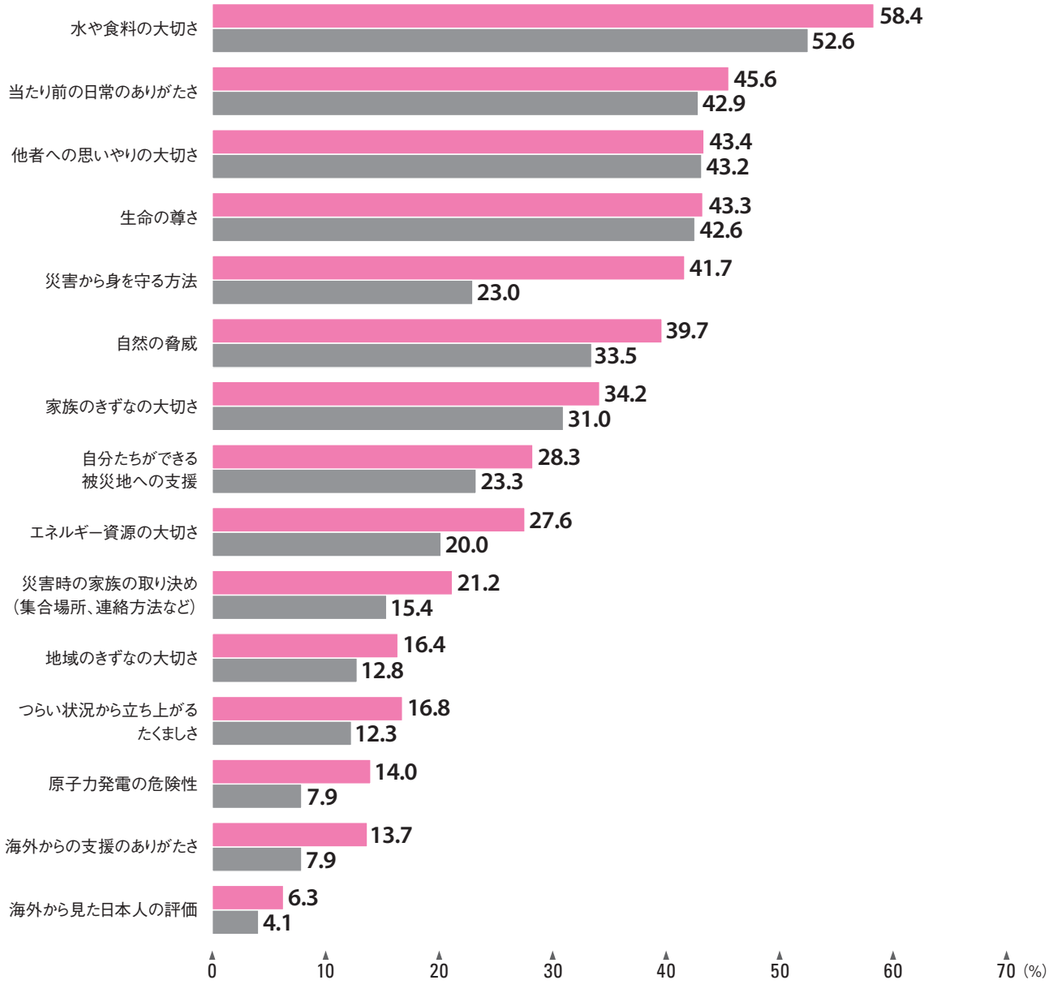
注1：「よくある」＋「時々ある」の%。
注2：「父親の協力度」は配偶者（子どもの父親）の回答者への理解・協力度をたずねた設問、「地域のつながり」は地域の中での子どもを通じた付き合いの状況を尋ねた設問に対する回答を得点化し、各群のサンプル数がおよそ2分の1になるようにわけた。

★子どもの父親が子育てに理解を示したり、協力しているかを得点化し2つの群にわけました（上図）。その上で「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」が「よくある＋時々ある」と答えた母親を見たところ、父親の協力が少ないほうが「いらいらすること」が「よくある＋時々ある」と回答する人が多いことがわかりました。同様に地域とのつながりを分析したところ、つながりが少ないほうが「どうしたらよいかわからなくなること」が多いことがわかりました。また、この傾向は首都圏、首都圏及び東北以外の地域のいずれにも見られるものでした。

震災を機に大切なことを話し合った親子が多い

Q 今回の震災をきっかけに、次のことについてお子さまと話していますか。

図3 3～5歳児　震災をきっかけに親子で話したこと



注1：「すでに話した」の%

★3～5歳児をもつ母親に震災をきっかけに親子で話したことについて聞きました。水や食料・当たり前の日常のありがたさ、他者への思いやりが上位にあげられ、震災を機に改めて大切なことを話し合った親子が多いことがわかります。また、大きな揺れ、帰宅困難な状況を体験した人が多い首都圏は、多くの項目を選択しており、よりたくさんのことを話しあったことがわかりました。さらに、「災害から身を守る方法」「災害時の家族の取り決め」などを話し合うことは、子どもの心を安定させる一面があるということもこの調査結果からわかりました（図表省略）。

出典：【3.11 東日本大震災の影響　子育て調査】
調査テーマ：東日本大震災後のお子さまの生活や様子、母親の子育て感情など
調査対象：0～5歳児をもつ母親（3,096 サンプル）
調査地域：首都圏：東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県／首都圏及び東北以外の地域：北海道、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県
調査時期：2011 年 5 月 27 日、28 日
調査方法：インターネット調査

調査データを踏まえ、園ができるもう一つの対応について考える

地域のネットワークを強化し 園、保護者、地域みんなで子どもを見守る

今回の調査では、東日本大震災後に母親の育児不安が高まったことがわかりました。こうした母親の不安を軽減するために、園にはどのような体制作りが求められるのでしょうか。恵泉女学園大学大学院の大日向雅美先生に伺いました。

恵泉女学園大学　大学院教授
大日向雅美
おおひなた・まさみ
専門分野は発達心理学。主な著書に『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』（岩波書店）、『母性愛神話の罠』（日本評論社）など。

園が率先して地域との関係を作り、母親をサポート

今回の調査結果から、災害などで母親のゆとりがなくなると、育児不安も増加するということがわかりました。また、この傾向は特に、夫や地域など、周囲の人々のサポートが十分でない場合に顕著だということも明らかになっています。平常時の子育ての課題が、災害によってさらにくっきり浮かび上がった結果だと言えるでしょう。

このような母親の育児不安を軽減するためには、園や保育者だけでなく、地域全体で子どもを見守っていることを母親に伝え、安心感を与えることも一つのサポートと言えます。そのためには、避難訓練に力を入れたり備蓄を進めるなどはもちろん、園が率先して地域とのネットワークを築き、災害が起こったときに地域全体で子どもを守れる体制を整えることが大切です。

東日本大震災では、地震が起こった直後に、近隣の方々が園の子どもたちの避難を手伝ってくれたおかげで、津波から逃れられたというケースが多くありました。これは、普段から地域との密なつながりがあったからこそできたことでしょう。

地域に住むお互いの違いを認めることが信頼関係に

地域とのネットワークを作るためには、近隣の人々へのあいさつを意識して行う、町内会の会合やイベントに参加する、園の行事に地域の人々を招待するなど、さまざまな方法が考えられます。また、地域の特徴と資源を知り、それを活用することでつながりを作るのも有効でしょう。ある園では、近隣の農園でブドウ狩りをさせてもらったことが地域との関係作りにつながったそうです。

しかし、一口に地域といっても、さまざまな職業や考え方を持つ方々がいます。最初からスムーズにネットワークを作るのは難しいかもしれません。それでもお互いの違いを認め、地道に交流や話し合いを続けることで、徐々に信頼関係ができあがっていきます。先生がたも「この地域にはどんな産業や企業があるのだろう」「どんな人が住んでいるのだろう」と、好奇心を働かせながら地域の方々と関わっていただきたいと思います。地域を知ることは、同時にそこに住む保護者のことを理解することにもなります。これらのことが、結果的に母親の育児不安の軽減につながるのではないでしょうか。

ポイント

- ◎地域とのネットワークを作り子どもの安全を確保する
- ◎地域の資源を知り、活用することで関係を深める
- ◎地域の人々や保護者のことをよく知る